

国語（^{教育学部}国語教育専攻 90分200点／^{保健医療学部} 60分100点／^{上記以外の全学部・学科・専攻} 75分150点）

注意事項

- (1) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- (2) 解答にはHBまたはBの黒鉛筆（シャープペンシルはHBまたはBの芯であれば使用可）を使用しなさい。
- (3) 受験する学部（専攻）によって解答すべき問題を指定しているので注意すること。

受験する学部（専攻）	解答すべき問題	解答方式	解答時間
教育学部国語教育専攻	一・二・三・四※	マーク ※四は記述	九〇分
保健医療学部	一・二	マーク	六〇分
右記以外の全学部・学科・専攻	一・二・三	マーク	七五分

- (4) 一・二・三の解答は、**マーク式解答用紙**の解答欄にマークしなさい。氏名・受験番号・解答科目を記入し、受験番号・解答科目をマークしてから解答を始めます。例えば、**10**と表示のある問いで「③」と解答する場合は、下の（例）のようにマークしなさい。

- (5) **四**の解答は、**記述式解答用紙**の解答欄に記述しなさい。改めて氏名・受験番号を記入してから解答を始めます。例えば、**記述式 2**と表示のある問いでは**2**の枠内に記述しなさい（枠外にはみ出したものは無効）。字数制限のある場合は、句読点・カッコも一マスを使うこと。

- (6) (3)の表に指定する「**解答すべき問題**」以外の問題に解答しても、その解答は**採点の対象外**とします。

- (7) 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。

(例)

解答番号	解	答	欄
10	①	②	③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

※ 問題に使用した文章の表記は、一部改めた場合がある。

国語（全学部の共通問題）

* ☐一・☐二・☐三の問題には、マーク式解答用紙を使って解答しなさい。

*ただし表紙(3)のとおり、受験する学部（専攻）によって解答すべき問題を指定しているので、注意すること。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私は二〇一一年に『暇と退屈の倫理学』〔國分二〇二二〕という書物を発表した。この書物の主張の一つは消費と浪費を概念の上で区別することにあつた。これは本稿の出発点となる議論であるから、はじめにそれを確認しておきたい。

同書は哲学を議論のベースとしているが、先の区別を論じるにあたって私が取り上げたのは、これまで哲学においてはほとんど論じられることのなかった贅沢ぜいたくの概念である。贅沢とは何か。それは必要の限界を超えた支出である。

この場合、必要とは人間が生存していくために最低限なくてはならないものを意味している。必要を超えた支出なのだから、贅沢は不必要である。たとえば、^aゴウセイな食事は人間が生存していくために最低限なくてはならないものであるとは言えない。また、ふんだんに装飾を施された衣装がなくても人間は生存していける。

つまり、もっと強い言葉を使つて言えば、贅沢とは無駄である。

だが、生存に必要なものだけがある生活とはいかなる生活であろうか。それは何かアクシデントがあつた時に容易に崩れ去つてしまふようなギリギリの生活である。ギリギリの生活の中で、人は豊かさを感じるができるだろうか。

腹八分目と昔から言う。それが健康にもよいのだろう。人間の生存にとつてはの方が望ましいのかもしれない。だが、やはり人間はたまには美味おいしいものを十二分に、腹一杯に食べたいと思うのではないだろうか。あるいは、服装にこだわることで、自分らしさを感じられることもあるのではないだろうか。

この点を論じるために私が参照したのが、フランスの社会学者ジャン・ボードリヤールの議論である。

ボードリヤールは『物の体系——記号の消費』（一九六八年）で次のように述べた。どんな社会も豊かさを求めたし、贅沢が許された時にはそれを享受してきた。あらゆる時代において、人は買い、所有し、楽しみ、使った。「未開人」の祭り、封建領主の浪費、十九世紀ブルジョワの贅沢……他にもさまざまな例が挙げられるだろう〔二四五～二四六頁〕。贅沢を享受することを ^A「浪費」と呼ぶならば、人間にとって浪費は、豊かさを感じ、充実感を得るために欠かせないものであつたと言ふことができる。

ところが、最近になって人間は全く新しいことを始めたのだとボードリヤールは指摘する〔同前〕。それが「消費」である。

浪費は必要を超えた支出を意味するのだつた。必要を超えた支出なのだから、浪費は満足をもたらす。満足すれば、そこで浪費は止まる。十二分に食事を取つたならば、そこでお腹はいっぱいになり、食事は終わる。つまり浪費には終わりがある。

それに対し、消費には終わりが無い。なぜか。消費が物そのものの享受ではなくて、観念や記号の受け取りだからである。

たとえばグルメブームのようなものを考えてみるとよい。あるお店が流行しているからという理由で人はそこにオモムく。そして一定の時間が経つと、今度は流行している別のお店にオモムく。どうして人がこのような行動を繰り返すのかと言え、それは「あの店に行った」という観念を受け取るためである。観念の受け取りには制限がない。だからこの消費行動には終わりが無い。

これを応用すれば、経済は人間を思いのままに、終わりのない消費のサイクルへと向かわせることができる。二十世紀はこれを大々的に展開し、大量生産・大量消費・大量投棄の経済を作り上げ、人類史上、前例のないほどの経済成長を遂げた（また、前例のないほどの環境破壊を行った）。

消費社会と呼ばれるこの経済体制の中では、我々は知らぬ間に消費者に仕立て上げられる。浪費家になって満足することを求めても、いつのまにか消費者にされてしまう。そして消費には終わりが無い。だからいつまで経っても満足が訪れない。

我々は浪費家になって、物を享受し、楽しんでよいはずなのに、消費者になるよう仕向けられ、**B** 終わりのない記号消費のゲームに引きずり込まれている。

ならばどうしたらよいか。物を受け取り、物を楽しめるようになればよい。楽しむことによつてこそ、我々はこの記号消費ゲームの悪循環から抜け出すことができる。そしてこのゲームに依存している社会を変えることができる。楽しむことは社会の変革をもたらす。これが『暇と退屈の倫理学』における私の提案の一つであった。

だが、ここには大きな哲学的問題があった。楽しむとはどういうことなのか、それが実はよく分からないのである。

哲学は美については古代からよく考えてきている。ところが、楽しさとか楽しむといったことについては実はほとんど考察がない。これは美しいものに比べて楽しいことはレベルが低いと思われるからかもしれない。

けれども、先に説明した消費と浪費の区別から出発して考えるならば、この問い自体は決して低次元のものではありえない。むしろ二十一世紀の社会を考える上で必須の問いであるとすら言える。

本稿は私にとって、この十年來の課題に対する現時点での一つの答えである。この課題に取り組むにあたり、一つの日本語の単語を取り上げようと思う。

「嗜好品」はそれ自体でどこか独特な雰囲気を感じさせる語である。しばしば他の言語にはこれに相当する語がないと言われる。辞書ではどう定義されているのだろうか。『大辞林』によれば、嗜好は、「たしなみ、好むこと。趣味。特に、飲食物についての好

み」を、嗜好品は、「栄養のためでなく、味わうことを目的にとる飲食物。酒・茶・コーヒー・タバコなど」を意味する〔松村二〇一九〕。

「栄養のためでなく」という断り書きが付いている点は興味深い。栄養は生存のためにどうしてもなくてはならないものである。それに対して、嗜好品は単に「味わう」ためのものである。どうしてもなくてはならないものではない。とはいえ、この語には、余計と不必要といったニュアンスは感じられない。ただ単に「味わう」ことが強調されている。

この語は本当に日本語にしか存在しないのだろうか。世界中の言語を広範囲に調査することはできないので、英語とフランス語とドイツ語についてのみ簡単な検討を加えてみたい。

英語の中に嗜好品に相当する語を探そうとすると見つかるのは、luxury goodsとか a luxuryといった表現である。また、フランス語では、luxuryの語源であるluxeを使ったproduit de luxeという表現が用いられる。

これら英語およびフランス語の表現のニュアンスは明らかであって、「大きな価値をもつもの」という意味である。また、英語のluxuryとフランス語のde luxeはもちろん細かく検討していけば様々な意味の違いを指摘できるであろうが、そこに、「不要である」とか「非本質的である」といったニュアンスが共通していることも論をまたない。

そう考えると、味わうことや楽しむことを主眼とした嗜好品という日本語との違いは歴然としていと言わねばならない。嗜好品という日本語は、大きな価値をもつとか、不要ないし非本質的であるとかいったニュアンスとはム^cエンであり、楽しんだり味わったりするためだけの対象を「嗜好」という言葉で積極的に指示しているからである。

注目するべきはドイツ語である。

この言語にはGenußmittelという語がある。genießenは「楽しむ」「味わう」の意の動詞で、Genusはその名詞形。Mittelは手段を意味する。したがってこの語は「楽しむ手段」とか「味わう手段」を意味しており、或る独々辞典はその語義を、「その栄養価のために消費されるのではなく、その良い味、その刺激効果、または同様のもののために消費される何か（食べ物、飲み物など）」と定義している〔Dudenredaktion 2015〕。

この語が日本語の嗜好品と非常に近い意味を持っていることが分かる。興味深いのは、或る独英辞典がこの語の語義として、「茶、コーヒー、アルコール飲料、タバコなど」と例だけを挙げるに留めていることである〔Scholze-Stubenrecht 2008〕。言うまでもなくこの事実、英語でGenußmittelを表現する^cことの困難を意味している。この困難は「嗜好品」を英語に翻訳する困難とほとんど同じ

である。

以上の簡単な調査から分かるのは、日本語以外にも「嗜好品」に相当する単語を持つ言語は存在しているけれども、確かにそれに相当する単語をもたない言語も存在しているという単純な事実である。

我々は或る言語に或る単語が欠けているという事実を拡大解釈することのないよう注意せねばならない。以上の事実は英語圏やフランス語圏には嗜好品についての考察が欠けているということを示し意味しない。「茶やコーヒーやアルコール飲料やタバコは云々」という仕方ですべての考察がなされていることも十分に考えられるのである。また同じく、「嗜好品」に相当する語を持つからといって、その言語の用いられている地域で嗜好品についての深い考察がなされていると考えることもできない。

とはいえ、ドイツ語が「嗜好品」に相当する語を持つという事実は、日本語の「嗜好品」という語を ^dナガめるところから始まった本稿の考察に対し、ドイツ語圏においては本稿の問題意識を深めるための手がかりとなる考察が既に行われた可能性があるという見込みを与える。

そしてこの見込みは当たっていた。ドイツ語で書を著した哲学者のカントが *Grundriss* についての考察を残しているのである。

以下、本稿はカント哲学に即しつつ、先の問いについて哲学的な議論を組み立てることを目指す。「哲学的」とはここで、概念の整理を行う営みという程度の意味で言われている。したがって厳密な意味で哲学的であるのかどうかは確かではない。

だが、分野についての ^eキルティがこのような曖昧である研究にも一定の学問的な価値があると思われるのは、これまでの嗜好品についての研究が社会学、文化人類学、歴史学、生理学あるいは医学といった専門分野に限られており、哲学的と呼びうる考察がこれに対して加えられたことはほとんどなかったからである。

或る嗜好品の背後にどんな社会的な背景や文化的な背景があるか（社会学、文化人類学）。或る嗜好品がこれまでの歴史の中でどのように生産され、消費されてきたか（歴史学）。或る嗜好品が人体にどのような影響をもたらすのか（生理学、医学）。

これらの問いはいずれも学問的に極めて大きな価値をもつ。本稿はただ、そうした学問的達成に、それらとはやや異なる、おそらくは哲学的と呼ぶのがふさわしい、嗜好品あるいは嗜好という概念についての考察を付け加えたいのである。

付け加えると言っても、嗜好品を哲学的に考察しようとする営みが、社会学、文化人類学、歴史学、生理学、医学等の分野での嗜好品研究にとって、参考資料程度の意味しか持たないということではない。哲学に要求されるのは、むしろ諸領域での研究の基礎となり、手助けとなるような考察である。よりよく整理された概念はどんな分野にも応用が可能だからである。

嗜好品についての哲学的考察がほとんどないという事実は、嗜好品という概念がいまだ十分に整理されていないことを意味している。そのような問題意識のもとで嗜好品を考察する時、場合によっては不真面目と見なされることすらあるかもしれないこの研究課題は、驚くほど広大で重大な哲学的問い、そして社会的課題と結びついていることが分かってくるのである。

カントの考察を見てみる前にいくつかのことを確認しておかねばならない。既に述べた通り、単語の欠如（「嗜好品」に相当する語の不在）は、その単語が存在していたならば名指していたであろう対象（嗜好品）についての考察の不在を必ずしも意味しない。

だが、だとしても、その対象を名指す単語が必要とされなかったことは事実として認定できる。英語やフランス語は世界史の中で支配的な地位を得たことのある、また得ている言語であり、そうした言語に或る対象を名指す単語が欠けているという事実は、それなりの意味を持っていると言ってもおそらく言い過ぎではない。

そして、話を哲学に限定するならば、カント以外に嗜好品を真正面から取り上げた哲学者はほとんど見当たらない。D この事実は、嗜好品が哲学にとって、取り上げるに値しない、どうでもよい存在であったことを意味している。

（國分 功一郎『手段からの解放』による）

問 1 二重線部 a と e の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 1 ～ 5。

「a
ゴウセイ」 1

- | | | |
|-------------|---------------|-------------|
| ① セイゴウ性を欠く。 | ② 悲劇にゴウキュウする。 | ③ ゴウウ災害の復旧。 |
| ④ 柔よくゴウを制す。 | ⑤ ジゴウ自得の目にあう。 | |

「b
オモムク」 2

- | | | |
|----------------|----------------|---------------|
| ① 新しい職場にフニンする。 | ② 家をフシンする。 | ③ フタンをおかけします。 |
| ④ フユウ層の選ぶ商品。 | ⑤ 地震にキョウフを感じる。 | |

「ムエン」^c 3

- ① オウエンを頼む ② 親類エンジャを訪問する。 ③ 名曲をエンソウする。
④ エンマンな解決。 ⑤ エンロお越しになる。

「ナガめる」^d 4

- ① チョウヤク力に優れる。 ② チョウシが上まらない。 ③ 億万チョウジャになる。
④ 遠い彼方をチョウボウする。 ⑤ 常識をチョウエツした発想。

「キテイ」^e 5

- ① ジョウキ機関車の保存。 ② キド哀楽の情。 ③ 博覧キョウキの人。
④ キチに富むコメント。 ⑤ 国際人権キヤクの批准。

問2

「A「浪費」」の本文における説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は 6。

- ① 健康を保つのに望ましい生存をめざし、豊かさを感じられない程度に支出するもの。
② 最低限の生存を維持するために、生活に必要なものに絞って支出するもの。
③ 欲を満たすための贅沢として、生存に必要なものを超えて無駄に支出するもの。
④ アクシデントがあっても生活が崩れないよう、余裕を見込んで支出するもの。
⑤ 自分らしさを感じられる程度に、必要を超えて服装や食に支出するもの。

問3

「B 終わりのない記号消費のゲームに引きずり込まれている」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **7**。

- ① 現代の人々が、大量生産・大量消費・大量投棄の経済にすっかり慣れてしまったことにより、物を享受し楽しむ終わりのない消費のサイクルへと薄々気付きながらも組み込まれているということ。
- ② 現代の人々が、物そのものを楽しみ満足するのではなく、刷り込まれた意味や価値の観念の受け取りに終始させられることにより、満足を感じないまま無限に消費行動を繰り返すサイクルに陥っているということ。
- ③ 現代の人々が、不景気のもとで買い控えする人々を浪費に向かわせることにより、観念の受け取りという制限なき浪費行動に駆り立て、浪費のサイクルを維持・発展させているということ。
- ④ 現代の人々が、物そのものを享受するだけでは満足できないようになった結果、価値観の刷り込まれた記号の受け取りである消費のサイクルに自分から加わるよう仕向けられているということ。
- ⑤ 現代の人々が、大量生産・大量消費・大量投棄の経済体制の中で、自覚することのないまま浪費を余儀なく強いられ、終わりのない消費のサイクルに巻き込まれているということ。

問4

「C 「嗜好品」を英語に翻訳する困難」とあるが、筆者が困難だと考えるのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **8**。

- ① 日本語の「嗜好品」は茶、コーヒー、アルコール飲料、タバコなどを指すため、英語に置き換える際には教義でこれらを禁ずる宗教や宗派の存在に配慮する必要があるから。
- ② 日本語の「嗜好品」には、英語の「luxury」には含まれている「大きな価値を持つもの」「生存に必要なもの」というニュアンスが含まれていないから。
- ③ 日本語の「嗜好品」に相当する言葉が英語には全く存在せず、英語に翻訳しようとしてもそれに該当する言葉がどうしても見当たらないから。
- ④ 日本語の「嗜好品」は、「楽しむ」「味わう」ためのものを肯定的に言い表すが、英語の「luxury」には「不要である」「非本

質的である」との否定的ニュアンスが含まれるから。

- ⑤ 日本語の「嗜好品」に相当する言語と英語の「Luxury」とでは、それぞれの文化でその言葉の指す意味内容が全く異なっているのは当然であるから。

問5

「D」この事実は、嗜好品が哲学にとって、取り上げるに値しない、どうでもよい存在であったことを意味している」とあるが、筆者は嗜好品を哲学的に考察することの意義をどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は 9。

① 哲学の分野では古代から美というものは考察されてきたが、楽しみが考察の対象とならなかったのは、美しいものに比べ楽しいものの価値が低いと思われてきたからである。嗜好品を言い表す英語がないことはその証左であるが、逆に言えば、日本文化の独自性は、嗜好品に価値を見いだすことによつて、より明確に説明できるようになる。

② これまで哲学において贅沢の概念は、ほとんど論じられてこなかった。そのため、贅沢をする行為を再評価するために消費と浪費の違いを考察し、楽しむことを手がかりとして嗜好品の存在意義に検討を加えることは、大量生産・大量消費・大量投棄をもたらす環境破壊から人類を救済するための第一歩となる。

③ 世界史でかつて支配的な地位を得た英語という言葉に、嗜好品に当たる語が存在しないという事実は、楽しむことが、美に比べれば所詮は不要で非本質的なことだと考えられていたことを明示している。しかしながら、消費の概念を問い直し、嗜好品の価値を見直すことは、現代の社会のあり方を見直すために本質的に必要なことである。

④ 嗜好品についてはこれまで、社会学、文化人類学、歴史学、生理学、医学などの分野で学問的に考察されている。しかし、嗜好という概念自体はレベルが低いと見なされ根本的な考察が欠けてきたので、嗜好の概念を検討することは、それらの学問分野に参考となる資料をもたらし、新たな学問分野を切り開くことにつながる。

⑤ 哲学において美は古代からよく考察されてきたが、楽しみについては重視されず、あまり考察されてこなかった。しかし、浪費の概念を消費の概念から区別し、嗜好品に着目して人が楽しむ行為を価値づけることは、現代社会が消費における一種の悪循環に陥っている状況から抜け出し、社会に変革をもたらす契機となる。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

諸君は「琴馴らし」という道教徒の物語を聞いたことがあるだろうか。

遠い昔、(注1) 龍門りゅうもんの峡谷に、真の森の王とも思われる一本の桐樹とうじゆがあった。梢は高くそびえて星と語り、根はふかく地におりて青銅色のとぐろを巻いて、地に眠る銀龍のそれとからみあっていた。ところが、あるとき、ひとりのすぐれた仙人がやってきて、この樹でふしぎな琴を造った。だがこの頑固な琴の精を馴らすには、ただ楽聖の手をまつよりほかはなかった。ながいあいだ、その楽器は中国の皇帝のもとに秘蔵されていたが、その弦から **p** 妙なる音をひき出そうと、かわるがわる努めた人々の努力は、すべて無駄であった。かれらのあらゆる努力に答えたものは、かれが歌いたいと思う歌とは、およそ似ても似つかない侮蔑的で、耳ざわりな音ばかりであった。琴はいかなる名手をも拒絶した。

ついに(注2) 伯牙という琴の名手があらわれた。かれは(注3) 悍馬かんばをしずめようとする人のように、やさしく琴を愛撫あいぶし、しずかに弦にふれた。かれが自然と四季を歌い、高山流水を歌うと、古木の追憶はことごとく覚醒したのだ。ふたたび甘い春の息づかいが梢にたわむれ、青春の奔流は溪谷を舞い下りながら、蕾つぼみの花にほえみかけた。たちまちにして聞こえてくるのは、夢みる夏の調べ、かすしれぬ夏の虫の声や藁わらにたく雨の音、憂えをふくむ郭公かくこうの声、聞け、虎の(注4) 咆哮ほうこう、谷にこだまするのを。秋ともなれば、荒涼たる夜、月は剣のように冴えわたり、霜おく草にかがやく、冬くれば、雪空に舞うは白鳥の群れか、嬉々ききとして枝を打つは、霰あられか。

ついで伯牙は調子を変えて恋を歌った。森は思いにせずむ熱い恋人のように揺れうごき、空には気位の高い乙女のような一片の雲がかがやき飛んだ。だが、雲が過ぎゆくとき、地上に曳ひくながい影は、失望に似て黒い。ふたたび調べは変わり、伯牙は戦いを歌った。剣をまじえる鋼鉄のひびきや駒の蹄ひづめをふみならす音を。琴中に龍門の嵐はおこり、龍は電光にうちのり、とどろく雪崩なだれは山々に鳴動した。恍惚くわくごとした **A** 皇帝は、かれの成功の秘訣けけつがどこにあるかを伯牙にたずねた。かれは答えた。

「陛下、他の人々は自分のことばかり歌うのに、私は琴に主題を選ばせたのです。ですから琴が伯牙か、伯牙が琴か、自分にもわかりかねました」

この物語は、芸術鑑賞の秘密を開示している。傑作というものは、われわれの最美の感情をかなでる一種の交響楽である。真の芸術は伯牙であり、われわれは龍門の琴である。美しい手並てなみの魔力にあうと、われわれの心に秘められた弦は目覚め、そのもとめに応えて

振動し、感動する。心は心に話しかける。われわれは語られざるものに耳をかたむけ、見えざるものに見いる。名匠はわれわれの知らない調べをよびおこす。遠く忘れ去られていた記憶は、すべて新しい意味をもって蘇^{よみが}えつてくる。恐怖におさえられていた希望や、みとめる勇気のなかった憧憬が、新しい栄光へとたちむかう。われわれの心は、画家が色彩をぬる画布である。かれらの絵具はわれわれの感情である。その明暗はよろこびの光であり、悲しみの影である。われわれが傑作によって存在するように、傑作はわれわれによって存在する。

芸術鑑賞に必要な心の共感^{共感}は、互譲^{かな}の精神のうえにうちたてられねばならぬ。芸術家が伝達の方法を知っていなければならぬように、観客はその伝言を受け容^いれるのに適^{かな}う態度を養わねばならぬ。茶匠・(注5)小堀遠州は、みずからは大名でありながら、次のような記憶すべき言葉をのこしている。「偉大な絵画に接するには、偉大な王侯に接するごとくせよ」傑作を理解するためには、その前に身を低くして息を殺し、片言隻句^{へんげんせきく}も聞きもらすまいと待ちうけなければならぬ。宋のある著名な批評家が、あるとき、愛すべき告白をした。「若いころには自分の好む絵を描く名人を賞讃^{さん}したものだ^だが、鑑賞力が熟^{じき}にしたがつて、名匠たちが、私の好みにしたがつて選んだ絵を好む自分を賞讃するようになった」今日、われわれのあいだで、名匠の気分を、労苦して、実際に学ぼうとするものが少ないのは、まことに残念である。頑固な無知のために、この簡単な礼儀さえつくそうとしないのである。そのために、眼前にひろげられた美^みの饗宴^{きやうえん}を食べそこなうことがよくある。名匠にはつねに饗応する用意があるのに、われわれ自身が鑑賞力を欠いているので、いつも空腹なのである。

共感をもつてすれば、傑作は生きた実在となつて、友情の絆^{きずな}でわれわれをひきつけてゆくようになる。名匠は不朽である。なぜなら、かれらの愛も憂^{うれい}も、われわれの心のなかにくりかえし生きてゆくからである。われわれの心にうったえるものは、(注6)伎倆^{ぎりよう}よりも精神であり、技術よりも人間である。より人間的であればあるほど、その呼びかけに対して、われわれは心から反応する。名匠とわれわれのあいだに、この暗黙の了解があればこそ、詩や小説のなかの主人公たちと、ともに苦しみ、ともに喜ぶことができるのである。日本のシェクスピア・(注7)近松は、劇作の第一原則として、観客に作者の秘密をうちあけることが重要だと述べている。かれの弟子たちの幾人かは、脚本を提出して師に認められようとしたが、かれの氣にいったものはひとつしかなかった。それは(注8)「間違いつづき」にいくらか似たもので、双子^{ふたご}の兄弟が見まちがえられて苦労するという筋書であった。近松は次のように述べた。「この作品は、劇本来の精神をそなえている。というのは、これは観客が考慮にいれられている。人々は役者以上に多くのことを知らされてい

るから、かれらはそのまちがいの原因を知っていて、罪もなく運命の手におしながされてゆく舞台の上の人物に同情するのだ」

洋の東西を問わず、**B** 巨匠は観客に秘密をうちあける手段として、暗示をあたえることの価値をけつして忘れない。傑作を観賞するもので、だれか心に浮ぶ無限の思いに、畏敬の念をおこさないものがあるうか。それらすべての、なんと親しみぶかく、共感的であることか。これにひきかえて、現代の風俗の、なんと冷やかであることか。前者には、人間心情のあたたかい流露が感ぜられるが、後者には、**X** な会釈しか感ぜられない。技術に没頭している現代人にとっては、自己を超越することは稀である。龍門の琴をいたずらにかき鳴らした楽人のように、ただおのれを歌うにすぎない。その作品は科学には接近しているかも知れないが、人間性からは遙かに遠い。日本の古い諺に「うぬぼれ男には惚れるな」というのがある。というのは、そんな男の心には、愛情を注いだとてそれを満たす余地がないからである。芸術においても同様に、虚飾は芸術家と公衆のいずれの側にあるを問わず、共感にとっては致命的である。

芸術においては、同質の精神が結合することほど神聖なものはない。**C** その出会うやたちまちに、芸術愛好家は自己を超克する。かれは存在すると同時に存在しない。かれは永劫を（注9）瞥見する。しかしその喜びを言葉に言いあらわすことはできない。眼には舌がないからだ。かれの精神は物質の束縛から解放されて、事物のリズムのなかに流動する。かくて、芸術は宗教と接近し、人類を高尚にする。これこそ傑作を神聖なものたらしめるものである。往時の日本人が、大芸術家の作品にささげた崇敬の念は熱烈なものであった。茶人はその秘蔵のものをまもるに、宗教的秘儀をもつてした。神龕——絹地の包みでやわらかくくるんで、そのなかに聖器がおさめてある——に達するまでに、幾重にも入れられた箱をすっかり開かねばならぬこともありがちであった。その作品が人の眼にさらされることは稀で、秘伝を授けられたものに限られていた。

（中略）

とはいえ、忘れてならぬことは、芸術の価値は、あくまでもわれわれに訴えかけてくる力の程度によるということである。われわれ自身の共感が普遍的であるならば、その芸術は普遍的言語であるといえよう。われわれの限定された性質、伝統、因襲の力は、祖先伝来の本能はいうにおよばず、美術鑑賞の能力範囲を限定する。ある意味では、われわれの個性そのものさえ、われわれの理解を制約する。われわれの審美的個性は、その類似性を過去の創作のなかに見いだそうとする。もつとも修練しだいでは、われわれの芸術鑑賞の能力が上げられることも事実であり、これまで認められなかった多くの美的表現を味わいうるようになる。しかし、結局のところ、

われわれは宇宙のなかに自己の姿を見るにすぎない——すなわち、自己特有の個性が、知覚様式を指定するのである。茶人とても、各
自の鑑賞能力のおよぶ範囲のものを収集したにすぎないのである。

これについては、小堀遠州に関連する話を思い出す。遠州はかつて、その弟子たちから、収集品を選ぶについて示した立派な趣味を
賞讃されたことがあった。「どれをとりましても美事なものばかりで、敬服しないものはございません。これを見ましても、先生が利
休にまさる立派な御趣味をおもちのことがよくわかります。あの方の収集されましたものは、千人にひとりしか、わかるものがなかつ
たのでございますもの」と、弟子たちは言った。すると遠州は嘆息していうのであった。「それは私が、いかに平凡な人間であるかを
示しているにすぎない。偉大な利休は、ただ自分の心に訴えるものだけを愛する勇氣があつたのだ。それにひきかえて、私は知らず知
らずのうちに、一般の人の趣味にこびてしまっていた。まことに利休は千人に一人の宗匠であつた」

はなはだ遺憾ではあるが、今日、芸術にたいする熱狂は、表面的にはさかんでありながら、真の感情に根底をもっておらない。われ
われの、この民主主義的時代においては、人は自己の感情とは無關係に、ただ世間一般に最高のものと思われるものだけをめてはやす。
かれらは高価であれば、優雅でなくともよく、流行品であれば、美しくなくてもよい。一般大衆にとっては、自分たちの産業主義の価
値ある産物である絵入り定期刊行物をながめることの方が、かれらが感心したふりをしている初期イタリアの作品や足利時代の名匠の
作品よりも、美術鑑賞の糧としては、いっそう消化しやすいのであろう。かれらにとっては、作品の質よりも美術家の名の方が重要で
ある。何世紀かまえに、**D** 中国の批評家が嘆いたように「世人は耳で絵を批評する」。今は、いたるところで、擬古典主義に嫌悪を
感ずるのは、この純粋な鑑賞力を欠いているためである。

なおひとつ一般に誤っていることは、美術を考古学と混同することである。古いものにたいする崇敬の念は、人間の性質のなかでも、
もっともよい特性であつて、いよいよこれを涵養かんようしたいものである。昔の大家は、後世への文明開化の道をひらいたのであるから、当
然、尊敬されてしかるべきである。かれらが幾世紀にわたる批評をへて、無傷のまま今日にいたり、依然として栄光につつまれている
という事実だけでも尊敬にあたいする。しかし、もしかれらの偉業を、単に年代の古さのゆえに尊敬するとしたら、まことに愚かなこ
とである。しかもわれわれは、自分たちの歴史的共感に関して、美的鑑賞力を無視するままに委まかせている。美術家が、無事に墳墓にお
さめられると、われわれは賞讃の花を手向ける。進化論がさかんであつた十九世紀には、種族を考えて個人を見失なうという習慣さえ
生じた。収集家は、一時期、あるいは一流派を説明するための資料を手にいれようと切望して、ただひとつの傑作が、一定の時期や流

派の多くの凡作よりも、多くのことを教えてくれることを忘れている。あまりに多く分類しすぎて楽しむことが少なすぎる。いわゆる

Y 陳列方法のために、審美的陳列方法を犠牲にすることこそ、多くの博物館の弊害となっている。

(岡倉天心『茶の本』による)

(注) 1 龍門の峡谷——中国河南省洛陽県の南にある山中の地。

2 伯牙——春秋時代の晋の人。琴の名手。

3 悍馬——暴れ馬。

4 咆哮——ほえること。

5 小堀遠州——茶人(一五七九―一六四七)。徳川家康に仕えた大名。

6 伎倆——うでまえ。

7 近松——近松門左衛門(一六五三―一七二五)。人形浄瑠璃、歌舞伎の脚本家。

8 「間違いつづき」——シェークスピアの作品。

9 瞥見——ざっと見ること。

問 1

波線部 p r の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は **10**。

「p 妙なる音」

10

① 場の雰囲気盛り上げる音

② 言葉では言い表せないほどの素晴らしい音

③ 落ち着いた心地にしてくれる音

④ 今までに聞いたことのない珍しい音

⑤ 人を奮い立たせるような音

「q 恍惚」

11

① 光り輝くさま

② 感心するさま

③ うっとりするさま

「^r片言隻句」

12

- | | | | |
|---|-----------|---|-----------|
| ④ | ほっとするさま | ⑤ | 落ち着きを失うさま |
| ④ | 自然と出る言葉 | ② | 不適切な言葉 |
| ⑤ | わずかな言葉 | ③ | つまらない言葉 |
| ⑤ | とりとめのない言葉 | | |

問2

X、Y

に入る言葉として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は13、14。

X

13

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| ① | 人間的 | ② | 形式的 | ③ | 好意的 | ④ | 対話的 | ⑤ | 同情的 |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|

Y

14

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| ① | 感情的 | ② | 印象的 | ③ | 主観的 | ④ | 日常的 | ⑤ | 科学的 |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|

問3

「A 皇帝は、かれの成功の秘訣がどこにあるかを伯牙にたずねた」とあるが、その後、伯牙自身が語る成功の秘訣とはどのようなことであつたと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は15。

- ① 自分の弾きたい音を奏でるのではなく、悍馬を乗りこなすように琴とひとつになり、琴に委ねるようにして演奏をしたこと。
- ② 自分自身の力量を信じるとともに、今までいろいろな琴に触れ、音を奏でてきた経験を琴の演奏することに役立てたこと。
- ③ 自然や四季折々の風情から始まり、色々な人間関係が織りなす喜びや悲しみなど、様々な主題を選択して演奏をしたこと。
- ④ お互いの演奏の領域をはっきりと区別して、その持ち味を活かしながら、それぞれの役割を明確に分担して演奏したこと。
- ⑤ 自然とふれあい、四季の移り変わりに目を向け、そこから生まれてくる感動を積み重ねていき、琴の演奏に生かしたこと。

問4

「B 巨匠は観客に秘密をうちあける手段として、暗示をあたえることの価値をけつして忘れない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **16**。

- ① 巨匠は、観客が自分の主観や感情にとらわれず、作品を見ることの大切さを知っており、観客に何を伝えたいのかを明確にすることで、作品への理解が深まるように心がけるとのこと。
- ② 巨匠は、観客が過度に喜んだり、苦しんだりすることは望ましくないと考えており、そのため構成をあいまいにして話の展開や結末を予測しにくくすることを意識しているとのこと。
- ③ 巨匠は、作品の意図するところを観客にあらかじめ伝えることの大切さを知っており、それとなくわからせる工夫をすること、その作品への共感が高まるように心がけるとのこと。
- ④ 巨匠は、観客が登場人物に感情を移入させることの重要性を知っており、登場人物の表情や言葉の選び方など技術的なことにも注意を払い、高揚感が高まるように意識しているとのこと。
- ⑤ 巨匠は、観客が先入観を持って作品を見ることは望ましくないと考えており、大切なことはあえて観客に知らせないことで、予測のつかない展開へと導くように工夫しているとのこと。

問5

「C その出会うやたちまちに、芸術愛好家は自己を超克する」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **17**。

- ① 傑作に出会うことにより、世俗的な欲望から解放され、抑えられていた感情や思考がよみがえることで、自分らしさを取り戻すということ。
- ② 傑作に出会うやいなや、その美しさに陶酔して自分を見失ってしまい、自分が存在しているのか存在していないのかわからなくなるということ。

- ③ 傑作と呼ばれるものによく接近し、その虚飾性を見抜き様々なことを吸収することで、芸術家を超越る存在になることができるということ。
- ④ 傑作と呼ばれるものに出会い、芸術家との間に心の共感が生まれることで、過去の自分とは違う次元の異なる自分を見いだしているということ。
- ⑤ 過去に出会った素晴らしい芸術作品にもう一度出会い、今の自分を見つめ直すことで、本来の自分を取り戻すことができるということ。

問 6

「D 中国の批評家が嘆いたように「世人は耳で絵を批評する」とあるが、中国の批評家はどのようなことを嘆いているか。その内容を説明したものととして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **18**。

- ① 世間の人々は、芸術に対して熱狂的ではあるが、自分の目で判断することをしないため、世間でもてはやされている名前の通った芸術作品であれば、高い評価が得られるということ。
- ② 世間の人々は、人気のあるものに飛びつく風潮があるが、芸術家の作品にかける思いや制作の意図が明確にうち出されているものでなければ、よい評価が得られないということ。
- ③ 世間の人々は、芸術に対して崇敬の念を抱いており、海外からの芸術作品や産業主義から生まれた美術的な娯楽のような作品は、高い評価が得られないということ。
- ④ 世間の人々は、古いものに対して尊敬の念を抱いているが、新しい芸術の流れに着目し、時代を先取りできるような独創的な芸術作品であれば、よい評価が得られるということ。
- ⑤ 世間の人々は、生活の様々な場面で芸術に触れることで作品への鑑賞力が高まり、自分の感情に純粋に訴えかけるものがなければ、高い評価が得られないということ。

(保健医療部の解答はここまで)

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

良岑^{よしみね}の四位の一つ子、花園といふ、殿上童^{わらは}に使ひ給ひける、年十歳ばかりなる、かたち清らに心かしこし。帝、生ひ出でぬべき^p者と御覧するに、父が供に筑紫^{つくし}に下りて、^(注1)唐土船^{もろこし}のかへりみに出で立つ。唐土人、「我が国に生ひ出づる者にも、劣らぬ者かな」とて奪ひとりて率^あていぬ。父母恋ひ悲しびて死ぬるも知らで、唐土に渡りて、書^{ふみ}を一にて読むに、それならぬものも、かしこき人のするわざせぬなし。琴よりはじめて、よろづのものの音、しらぬなく上手なり。

十にて渡りて、八年といふに、交易の船につきて、この国に帰りぬ。帝聞こし召して、「あやしくて隠れにし童、まうで来たなり」とのたまひて、召して御覧するに、童のい^xにし時よりも、かたちも清らに見給ふ。^Aさらにかしこうせぬわざなし。帝、「上にさぶらひし者なり。ものの師仕うまつらせて聞かむ」とのたまひて、式部丞^{しきぶのじやう}^(注2)かけたる蔵人になされぬ。しばしありて、^(注3)かうぶり得て、兵衛佐^{ひやうさのすけ}になりぬ。東宮にも上許されて、琵琶仕うまつる。若宮にも箏の御琴仕うまつる。

かくて、いとかしこき時の人にて、夜昼、内裏^{うち}、東宮にさぶらひて、定めたる妻^めもなし。思ひかくまじき人にも聞こえなどして、このあて宮の名高くて聞こえ給ふを、^qいかでと思ひて、いひたはぶる人にもいはず、よき人の娘賜へど得で、^(注4)大將殿の兵衛佐の君、^(注5)同じ司にもし給ふを、うるはしく語らひ聞こえてあるを、^(注6)おとど見給ひて、「ここにかく若き男子^{おのこ}ども、あまた侍る所なり。^B定めたる里なんどもまうけ給はざるを、顕澄^{あきすみ}が侍る所を里と思ほせかし。宮あこまろを弟子にし給へ。いかでこれをだに、もの聞き知りたる者に生ほし立てむ」とのたまひければ、^(注7)行政喜びて、兵衛佐の君の御方に曹司^{さうし}つくりて、ただそこにのみなむありける。

三月ばかり、^(注8)御前の花の盛りに、花の宴し給ひけるに、行政うた作り、遊びもしければ、君だちの御衣^ぞ一襲^{かさね}賜ひけるにも、思ふ心ありけれども、その日にはあらで、^(注9)宮あこ君にいふほどに、「君に、いささかなること聞こえむ。人にのたまふな。行政を思ほさば」。宮あこ君、「なほのたまへ。人にもいはじ」とのたまふ。行政、

「四方^{よも}の海に玉藻^{たまも}かづきし海人^{あま}しもぞ荒れたる波の中も分けける

おほけなき心、憂きものになむ」と書きて、宮あこ君に、「これ中のおとどの姫君に奉り給ひて、御返り事取りて持ておはしませ。さらずは、御笛も習はし奉らじ」。宮あこ君、あて宮に奉らせ給ふ。「誰がぞ」とのたまふ。「まろに笛習はし給ふ人のなり」といふ。「^rめざましのことや」とて見給はず。「なほ見給ひて、御返り賜へ」とのたまひて、「今いはむものぞ」とて、^C泣きののしり給ふ。

あて宮、「かかる人の返り事はせぬものぞ。ただ『見せつれば、めざましとなむいふ』とをのたまへ」。宮あこ君、「さらば、まろに笛習はさじをや」など泣き給ふ。

(『宇津保物語』による)

(注) 1 唐土船もろこしのかへりみ——唐との交易船の監察を行うこと。

2 かけたる——兼任している。

3 かうぶり得て——従五位に叙せられて。当時、五位以上は昇殿を許された。

4 大将殿——左大将源正頼。あて宮、兵衛佐の君(頭澄)、宮あこまろ(宮あこ君)の父。

5 同じ司——頭澄が行政と同じく兵衛府に勤めていたことを指す。

6 おとど——大将殿(正頼)のこと。

7 行政——花園の元服名。

8 御前——ここでは大将殿の邸の庭のこと。

9 宮あこ君——本文に登場する大将殿の子の中では最年少。

問1

波線部 p ～ r の解釈として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は **19** ～ **21**。

「**p** 生ひ出でぬべき者」

19

- ① 生まれるはずもないのに生まれた子
- ② 今後二度と現れそうにない優れた子
- ③ 現世に生まれてはいけない不遇の子
- ④ この先きつと伸びるはずの有望な子
- ⑤ 出世がかないそうにない不運な子

「**q** いかでと思ひて」

20

- ① あて宮に対する世間の評判はどのようなかと思つて
- ② 自分はあて宮にどのようなに思われているかと思つて
- ③ あて宮をどうにかして自分の妻にしたいと思つて
- ④ あて宮の容貌はどれほど美しいのだろうかと思つて
- ⑤ 自分とあて宮の身分の差はどうしようもないと思つて

「^rめざましのこと」

21

- | | |
|-------------|--------------|
| ① 気に入らないこと | ② はっきりしていること |
| ③ 目にも鮮やかなこと | ④ すばらしいこと |
| ⑤ おそれ多いこと | |

問 2

二重線部 **x** 「に」を文法的に説明したものととして適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **22**。

- | | | |
|--------------------|--------------------|---------------------|
| ① 完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」 | ② 動詞の連用形活用語尾「に」 | ③ 断定の助動詞「なり」の連用形「に」 |
| ④ 時間を示す格助詞「に」 | ⑤ 順接確定条件を示す接続助詞「に」 | |

問 3

「^Aさらにかしこうせぬわざなし」の解釈として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **23**。

- | | |
|---------------------|----------------------|
| ① 何事も立派にしないことは全くない。 | ② 今後も学問をしないわけにはいかない。 |
| ③ この上なく恐れ多くてもつたいない。 | ④ とはいえ才能を磨かないわけではない。 |
| ⑤ その上秀才をひけらかすことはない。 | |

問 4

「^B定めたる里なんどもまうけ給はざるを、^{あきずみ}顕澄が侍る所を里と思ほせかし」の解釈として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **24**。

- | | |
|--|---|
| ① 心に決めた女性がいらっしゃらないのであれば、顕澄が住んでおります所をご自宅だと思いいになつてはいかがでしょうか。 | ② 自分の居場所を人に知られたくないとお考えでしたら、顕澄がお招きする場所はいつでも使えるとお思いいになつて下さいよ。 |
| ③ きつとご自宅はご用意なさるはずだということですが、顕澄がおります所も自分の家だと思つて、お越し下さいませ。 | ④ 生まれ故郷に何度も赴くことができないういられつしやるのであれば、顕澄の住む所をご自分の実家だと思つて来て下さいね。 |
| ⑤ ご自宅はまだこれと決めていらつしやらないようですので、顕澄が住んでおります所をご自分の家だと思いい下さいよ。 | |

問5

「^C泣きののしり給ふ」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は 25。

- ① 楽器の演奏を教えてくれる人から、返事がもらえなければ今後は指導しないと警告されたことを思い出したから。
- ② 自分の技芸の師から頼まれた返事がもらえそうにないので、師から教授されなくなることを大いに危惧したから。
- ③ 返事を返したくても返せない事情がある姉の苦衷を察すると、弟としても胸が張り裂けるような思いがしたから。
- ④ 自分の切なる願いに応じないばかりか、自分を大事に思う人の悪口まで言う姉の心の狭さが情けなかったから。
- ⑤ 自分の苦しい立場を分かっているが、わざと自分を困らせるように振る舞う姉の冷淡な態度に腹を立てたから。

問6

行政は宮あこ君に託した文でいうことを伝えたかったのか。その内容として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は 26。

- ① 人に知られてはならない恋であることは承知しているが、たとえ荒波に身を投げる結果になろうと、思いを明かさないではないられないということ。
- ② 天下に知られた美しい女性であるから、多くの男が海藻がなびくように群がり寄るだろうが、その中の玉藻である自分を必ず見分けてほしいということ。
- ③ 長年妻をめとらずにきたことが報われ、海中で探し当てた玉藻のような素晴らしい女性に巡り会えたことを、心から喜んでいえるということ。
- ④ 身のほどをわきまえない恋だとは思いますが、並々ならぬ苦労をした漁夫のように、自分は困難を恐れず打ち明けるのだということ。
- ⑤ 恋をするということは、荒波をかき分けて海の底に潜るような苦しみを味わうことでもあるが、それも自分の宿命だと考えているということ。

問 7

本文の内容と合致するものを、次の中から一つ選びなさい。 解答番号は **27**。

- ① 行政は大将の息子と同僚であつた縁で、その弟の宮あこ君を弟子にしてくれと大将から頼まれ、出世の好機だとよろこんで大将の邸に住み込んだ。
- ② 昇殿を許された行政は多くの女性から注目され、高位の貴人からも娘婿にと懇請されたが、女性には目もくれず、昼夜を問わず政務にいそしんだ。
- ③ 大将邸で花見の宴が催された時、あて宮を見た行政は恋に落ちたが、その日はわざと何も言わず、他日、弟子であて宮の弟である宮あこ君に恋文を託した。
- ④ 行政は子ども時分に父について筑紫に下り、父の役目であつた唐船の監察の際、誤って乗船したまま唐に連れて行かれたが、そこで彼は立派に学芸を修めた。
- ⑤ 十八歳で交易船に便乗して唐土から帰国した行政は、さらに美しく成長し、学問・技芸にもすぐれていたので、帝や皇太子などからも厚遇された。

問 8

本文の出典である『宇津保物語』について解説した次の文章の空所 a、b に当てはまる作品の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。 解答番号は **28**。

『宇津保物語』は二十巻からなる我が国最初の長編物語であるが、初めての作り物語とされる『(a)』から作り物語の最高傑作とされる『(b)』への過渡期の物語として注目される。

- | | | | | |
|---|---|------|---|------|
| ① | a | 竹取物語 | b | 伊勢物語 |
| ② | a | 伊勢物語 | b | 竹取物語 |
| ③ | a | 竹取物語 | b | 源氏物語 |
| ④ | a | 源氏物語 | b | 竹取物語 |
| ⑤ | a | 伊勢物語 | b | 源氏物語 |

※ 教育学部国語教育専攻の受験者は、このあとの **四** (記述式) にも解答しなさい。

国語（国語教育専攻の追加問題）

*教育学部国語教育専攻の受験者は、☐一・☐二・☐三に解答し、さらに次の☐四にも解答しなさい。

*☐四の解答には、**記述式解答用紙**を使いなさい。

四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私はここで紀貫之が書いたとされる仮名序の最も中心的な一節を読んでおこうと思います。それはまさに序文冒頭の一節です。

A やまとうたは、ひとのこゝろをたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける。世中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るもの、きくものにつけて、いひいだせるなり。花になくうぐひす、みづにすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬ鬼神をも、あはれとおもはせ、をとこ女のなかをもやはらげ、たけきものゝふのこゝろをも、なぐさむるは哥なり。

貫之はここで、まず和歌の種子は「人の心」にあると言っています。そして心は、自然界の風景や事物が変化するのに合わせて、千変万化する言葉、すなわち歌となって現れ出るのです。さらに、彼は花に鳴く鶯や水辺で鳴く蛙に代表されるすべての生き物が、同じように歌を詠む詩人なのだと言っています。このことは、日本の詩の一つの特性と言ってもいい高度に洗練されたアニミズムの、極めて早い時期に表明された理論として注目されます。

そして貫之は、さらに興味深い主張を展開します。彼は和歌というものは、「力をもいれずして」天地を感動でゆり動かし、また死者の靈魂をも感激させると言うのです。言い換えると、超自然的な存在をさえ揺り動かす力が、この甚だちつぽけな言葉の構造体にはあるのだと言うのです。この思想は、詩というものが、超自然的存在に靈感を吹きこまれた特殊な能力を有する人間の口を通して語られる、超自然そのものの意思であるという、少なくとも西欧の読者には親しいであろう詩観とは、きわめて異なる詩観を語っています。核心にあるのは「人間の心」です。その人間の心は、一木一草のゆらぎにも容易に同化し、鳥や獣、虫や魚とともに詩を歌う心です。

B このことはまた、日本の和歌の形式が、五七五七七というきわめて少ないシラブルで完結している事実をも説明するものでしょう。山川草木に共鳴し、鳥獣虫魚とともに歌うことを可能にする詩型は、単純さという美徳を備えるためにも、短くてよいし、また短い方が、大量の暗示と他者への呼びかけを可能にする点で、むしろ有利であるということさえ言えるからです。

これを言いかえれば、日本の和歌は、独創的な着想や天才的なひらめきに絶対的な優位性を認めるのではなく——もちろんそれらも大いに尊重されますが——さらに重視されたのは、一人の人の歌が他の人によって、さらには自然界の生物、また無生物によってさえ

応答され、両者の間に唱和する関係が生まれることでした。

実際、「和歌」という言葉の「和」という語は、一つには大和という意味でもありましたが、より本質的な意味で、「人の声に合わせ応じる」、ひいては心を相手に合わせて、「互いになごやかに和らぐ」という意味があるのです。つまり相手と調子を合わせて唱和し、調和し合うことが、和歌という語の根本的な意味でした。

紀貫之が主張しているのは、まさにこのことです。そして、和歌という語の意味がこのようなものである以上、それが男女の関係を親密なものにし、勇猛な武士の心をも慰めるものであるべきなのは当然でありました。

つまり、和歌の理想は、超自然の恐るべき力をさえやわらげ、天地自然や死者の魂をさえ感動させるところにあったので、そのため和歌は、古代・中世においては、旱魃や洪水などの天災を押しとどめ、猛威をふるう流行病から人々を守る呪文そのものとして唱えられることにもなったのでした。和歌にはそれだけの超自然的な感応力があると信じられていたからです。C 和歌のそのような力に対する信仰は、古代・中世の日本社会には、一般庶民の間にさえ——むしろ庶民の中の方が一層強く——存在しました。

恐らくこのようなきわめて実用的な局面において、和歌は西欧の「詩」とはかなり違った性質をもっていたのではないのでしょうか。それは「人の心」を種子として生まれるものでありながら、究極においては、「調和」の原理そのものによって、超自然的な恐るべき存在までも、やわらげ、人間化してしまう力を、潜在的に持っているのです。

詩の力を日本人がこれほどにも無邪気に信じることができた背景には、あるいは日本列島がその地理的位置の特殊性から、きわめて長い歲月、外敵による侵略を受けることなく、幸運にも自国内での平和な日常の繰返しを続けてこられたからだという事実もあるかもしれません。

同時に、日本列島の気象が、東南アジア一帯のモンスーン気候の支配下にあるため、夏は高温・多湿多雨であり、それが植物の繁茂には絶妙の条件をなしていたという事実があります。同様に、日本の春と秋の気候は起伏に富んでおり、動植物の種類も多彩です。これは貫之が序文冒頭でまず鶯や蛙の声について言わずにいられなかった事実を説明しています。

日本人のアニミスティックな自然観の形成は、このような観点からすれば、a ノガレ難い宿命的事実であったことがわかります。そしてそれが、日本の詩の基本的性格を形づくっていたことも理解できるでしょう。

紀貫之は『古今和歌集』の序文で、多くの関心事について語っていますが、私はそれらに細かく立ち入ることはしません。この序文の中心が今とりあげた一節にあることは明らかだからです。私はただ、今見たような思想が、結局、和歌のみならず日記、物語、随筆

のような散文にも、茶道、華道のような日常生活を限りなく芸術化してゆく日本独特の「生活芸術」にも、また一般的に言って祭礼をはじめとする年中行事すべてにわたって、ある共通した底流をなしていると考えます。

そして、これがまた歴代の「勅撰集」を貫く基本的な編集理念でもあったということを強調しなければなりません。人間の「和」を求める心が、究極においては超自然の恐るべき力さえ和らげ、調和させるということ、そしてそのための最も尊ぶべき手段が、「和歌」であるということ、これが勅撰和歌集を貫いている理念だったということです。

これはすなわち、天皇の治世の理想とすべき觀念にほかなりませんでした。もちろん現実には、藤原家という貴族が実権をにぎっていた四百年間、さらにその後六百年間続いた武家による支配の時代の、約一千年の間、ほとんどすべての時期において、天皇はみずから統治者として政治の全権を ショウアク することはなく、貴族や武家が権力を代行したのでした。しかし、これらの貴族や武家も、軍事的には何の力も持たない最高統治者にすぎない天皇の権威を、公然と否認したことはありませんでした。逆に、天皇の精神的権威にあやかることによって自らの権力の正当性を主張するのが常だったと言っているのです。天皇の権威は、現世的なものであると同時に、神聖で絶対的なものと見なされたからです。

その場合、天皇が「勅撰和歌集」編纂事業の中心に存在するということは、大きな意味を持っていました。和歌そのものが、すでにのべたように、神聖な力を発揮するものと見なされたからです。貴族も武家も、勅撰和歌集編纂の企てがあれば、進んでそれを援助するのです。

中でも顕著な人物を一人だけ挙げれば、十四世紀前半に室町幕府を開き、その初代將軍となった武將足利尊氏です。彼はまさに乱世の英雄で、近代日本での一般的評価は、むしろ陰謀家、反逆者という暗いイメージが強かったのです。しかし実際には、彼は和歌・連歌を愛し、みずから優雅な歌を数多く詠んだ歌人であり、しかも『新千載和歌集』という勅撰和歌集を編むための原動力とさえなった人でした。そして彼の開いた室町幕府は、たえず動乱の波に揺さぶられながらも、約二百年のあいだに、能楽、連歌、中国風の水墨画、茶道、華道などの諸芸術を保護発展させましたし、禅宗寺院を拠点とする文化、とりわけ庭園文化の発達にも大いに貢献しました。

紀貫之が『古今和歌集』序文で掲げた「和」の理想は、貴族のみならず、武家によっても、自分たちの追求すべき理想だと考えられたのです。こういう事実からも明らかのように、彼が序文でのべていた和歌の本質に関する理論は、単なる詩歌論の枠を越えて、帝王も將軍も等しく尊重すべき、天地万物すべてを貫く平和と繁栄と共存の原則を簡潔にのべたものと受け取られていたのです。

これこそ、五百年間以上にわたり、二十一人の天皇のもとで D「勅撰和歌集」が編纂され続けた最も根本的な理由だったと私は思い

ます。つまりそれは、単なる詩歌集ではなく、天皇と、その背後にいる実際の権力者たちの治世が、大いに繁栄している平和な時代であることを広く世に示す上で、きわめて効果的な政策であるという側面を持っていたのです。

(大岡信『日本の詩歌 その骨組みと素肌』による)

問1 二重線部 a、b のカタカナに相当する漢字を楷書で答えなさい。なお、送り仮名が必要なときは、それも書くこと。解答番号は、

a は記述式 1、b は 2。

問2 波線部 p、q の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、数字で答えなさい。解

答番号は、記述式 3、4。

「^p千変万化」 3

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| ① 状況は様々に変化するが、根本は不変であること | ② 状況が様々に変化して、極まることがないこと |
| ③ 状況の変化に合わせて、物事が決まっていくこと | ④ 状況は変化しても、全ては単純化していくこと |
| ⑤ 状況は変化しても、同じ調子であること | |

「^qアニミズム」 4

- | | | |
|--------|--------|--------|
| ① 動物愛護 | ② 自然保護 | ③ 自然崇拜 |
| ④ 天然主義 | ⑤ 風景描写 | |

問3

次の和歌は紀貫之が詠んだものであるが、その和歌と同じ修辞技法が用いられていない和歌を、後の中から一つ選び、数字で答えなさい。解答番号は、**記述式 5**。

「誰があきにあらぬものゆゑ女郎花なぞ色にいでてまだき移ろふ」

- ① ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは風よりほかにとふ人もなし
- ② 唐衣たつ日はきかじ朝露の置きてしゆけば消ぬべきものを
- ③ 秋霧のともにたちいでて別れなばはれぬ思ひに恋ひやわたらむ
- ④ 唐衣きつつなれにしつましあればはるきぬる旅をしぞ思ふ
- ⑤ 住江のまつほど久になりぬれば葦鶴のねになかぬ日はなし

問4

「**A** やまとうたは、ひとのこゝろをたねとして、よろづのこのの葉とぞなれりける」とあるが、筆者はこの一文を踏まえて和歌とはどのようなものと述べているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、数字で答えなさい。解答番号は、**記述式 6**。

- ① 「種」は「心」、「葉」は「言葉」を表しているように、植物に由来する二つの言葉を示して、和歌は超自然的なもので、靈感を吹き込まれたような特殊な能力の持ち主が語るものである。
- ② 「種」と「葉」という植物に由来する縁語仕立てになっており、天然の自然の力に任せて、縁語が連なるように言葉を連想し、歌の言葉を生成させたのが和歌である。
- ③ 和歌は人が作るものではなく、「種」と「葉」という植物に由来するふたつの言葉は、人の心の種から生まれて、おのずと育つ自然的な言葉が和歌である。
- ④ 「種」と「葉」という植物に由来する言葉を使い、和歌に草木が育つ自然の力を感じさせるとともに、心から自然の変化に合

わせて湧き出てくる言葉が和歌となる。

⑤ 「種」はすなわち「心」で、人のこころの中にあり、「思い」になる。「思い」は「葉」で、すなわち「言葉」となり、その思いを独創的な着想やひらめきによって言葉にするのが和歌である。

問5

「**B** 日本の和歌の形式が、五七五七七というきわめて少ないシラブルで完結している」とあるが、その利点はどこにあるか。次の【 】内に当てはまるように**三〇〃四〇字**で説明しなさい。解答番号は、**記述式 7**。

和歌の音節が極めて少ないことの利点は、【 】

【 】ところにある。

問6

「**C** 和歌のそのような力」とあるが、それはどのような力であるか。次の【 】内に当てはまるように**三〇〃四〇字**で説明しなさい。解答番号は、**記述式 8**。

和歌の力とは、【 】

【 】力である。

問7

「D」勅撰和歌集」が編纂され続けた最も根本的な理由」とあるが、その理由を説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、数字で答えなさい。解答番号は、**記述式 9**。

- ① 紀貫之が『古今和歌集』仮名序で示している和歌の理論は単なる詩歌論ではなく、和歌の「和」の理想は、貴族や武士にとっても追求すべき理想で、動乱や災害で混乱した世の中を立て直すために必要だと受け止められていたから。
- ② 紀貫之が『古今和歌集』仮名序で示している和歌の理論は単なる詩歌論ではなく、和歌には神聖な力があり、「和」を求める心が自然の脅威を和らげ、人々を調和させるというので、特に貴族よりも武家の間で和歌の力が信仰されていたから。
- ③ 紀貫之が『古今和歌集』仮名序で示している和歌の理論は単なる詩歌論であるが、天皇が編纂の中心に存在するということは、貴族や武士が天皇の精神的権威にあやかり、自らの権力を正当化するものであったから。
- ④ 紀貫之が『古今和歌集』仮名序で示している和歌の理論は単なる詩歌論ではなく、和歌は神聖な力を発揮するものとされており、天皇が編纂の中心であるということは、天皇の権威も神聖で絶対的なものになるから。
- ⑤ 紀貫之が『古今和歌集』仮名序で示している和歌の理論は単なる詩歌論ではなく、すべての人が尊重すべき、平和と共存の原則が述べられており、天皇の治世が平和で繁栄している証明であり政策でもあったから。

問8

十九世紀末に短歌革新運動を起こし『古今和歌集』や紀貫之を批判した人物（**x**）と、その著作（『**y**』）の組合せとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、数字で答えなさい。解答番号は、**記述式 10**。

- | | | | |
|------------------|-------------------|-----------------|---------------|
| ① x 佐佐木信綱 | y 万葉集概説 | ② x 島木赤彦 | y 歌道小見 |
| ③ x 正岡子規 | y 歌よみに与ふる書 | ④ x 石川啄木 | y 一握の砂 |
| ⑤ x 与謝野晶子 | y みだれ髪 | | |

（国語教育専攻の問題は、ここで終了）

（
余
白
）